

世界の Goods Press グッズプレス特別編集

Town Mook
TOKUMA SHOTEN
定価1000円
(タウンムック)

WATCH
SPECIAL

1999完全詳報

ジュネーブ・サロン&バーゼル・フェア

世界最高のステイタスを誇る
スイスの2大時計フェアで発表された80ブランド
400以上の新作を詳細に解説



シチズン X-8 (エックスエイト) の全貌

1966年、我が国にある画期的な電子式腕時計が登場した。
その名も、電子てんぷ式腕時計「X-8」である。
電子ウォッチ時代への扉を開いた腕時計の実像を追う。

リアルアンティーク・ウォッチセレクション

お飾りではなく実用時計としてアンティークを再認識する。30万円までの価格帯で、しかも名のあるメーカーの本格機械式腕時計に、リアルアンティークの価値を見出す。

ジュウ溪谷で生まれた高精度技術史を

スイスでも数少ないマニファクチュール、ジャガー・ルクルト。彼らこそ、数世紀にもわたって当地に蓄積された時計史の正統な継承者である。

現在に伝えるジャガー・ルクルト

AHCI

昨年まで、会場が一番奥という不遇な場所で行っていた独立創作時計師協会「アカデミー」。今年には会場中央部という絶好の場所にまったく新しいブースを構え、その存在を強烈にアピール。彼らの存在なくして、今、時計は語れない！

A H C I 独立時計師集団アカデミー

←アンデルセンの「モントレ・ア・タクト」。ケース・サイドからも時刻が読み取れるユニーク・ピースだが、とにかく巨大。ギョーシェ仕上げのほか、クライスラー・ビルディングをエンブレミングしたモデルも出展された



左はブースを訪れたブランパンのピパー社長。ほかにもランゲ・アンド・ゾーネのブルムライン氏など、大会社のVIPたちの姿がこのブースで見かけられた。とはいえ、堅苦しい雰囲気はなく、夕方になればシャンパンが開けられてお祭り気分。右はスポンサー紹介のパネル。様々な国の企業・個人が彼らを応援している



↓バーゼルに復帰したアントワーヌ・プレジウソとエングレーバーのキース・エンゲルバート。ジュネーブ市内に工房を構えるエンゲルバート氏は、有名メーカーのエングレービングも手がける



アントワーヌ・プレジウソ(左)
Antoine Preziuso

アカデミー・オルロジエ・アデ・クリエイターズ・インディペンデント（独立創作時計師協会）。通称「アカデミー」は、スイスのみならず、ドイツ、イギリスなどにおいて、個人で工房を構えて活動する時計師たちの集団である。

彼らのような時計師は、実はずっと以前から時計界には存在していた。ただし、かつての独立時計師の多くは、大メーカーからの請負仕事を主としており、その名前が文字盤やムーブメントに刻まれて世に出ることはまれであった。もともと、そのうちの何人かは自己のブランドを

興じて成功を取め、大メーカーへと成長したケースもあったが大半は日の当たらない存在であったことに違いない。

だが現代の独立時計師は、このアカデミーという組織を通じ、自分たちのポリシーや製品の情報を外へ向けて発信する。今や彼らの存在は、無視したり隠蔽できないほどに重要性を持ちつつある。それはフェア期間中に、多くの大メーカーの重役たちがアカデミーのブースを訪れたことでも証明されているだろう。

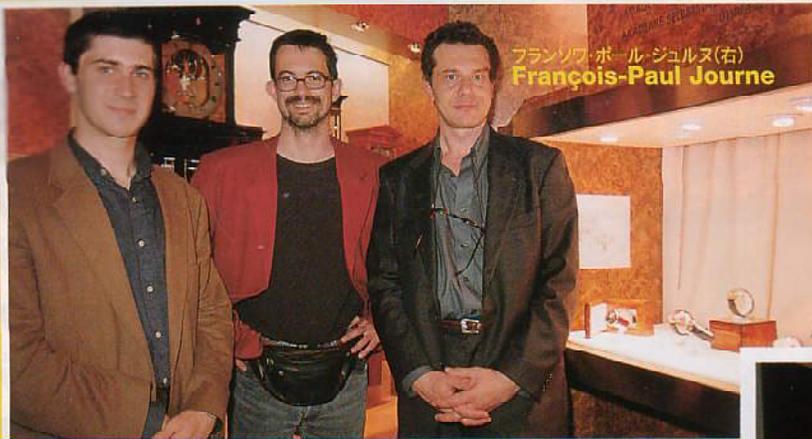
アカデミーに集う時計師たちは、年齢も国籍もキャリアも作品のテイストも、実にさまざま

だ。クロックを得意とする者もいれば、一品製作のコンプリケーションを得意とする者、なかには販売を目的とせず、自分のためだけに時計を作る者さえ存在する。しかし、おしなべて彼らの技術は高度であり、彼らなくしては生み出されることのない大メーカーのユニーク・ピースも多い。「それでは昔の時計師と同じではないか」と思われるかもしれないが、決定的に違う点がある。それは今日では独立時計師の作品であることと隣りせず、むしろセールスポイントとしてアピールする大メーカーが少なくないことだ。

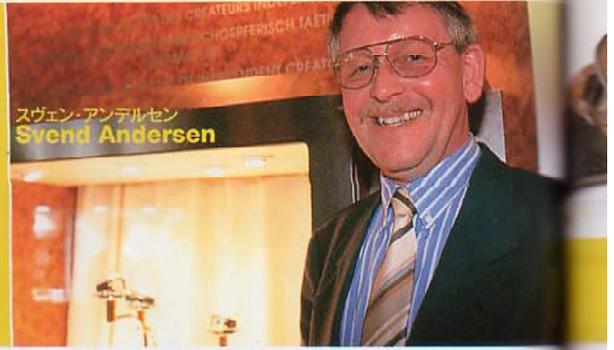
プレジウソのユニバーサル・ジュネーブのトゥールビヨン、クリストフ・クラール作のコラムのクリスタル・トゥールビヨンなど。大メーカーの意識も確実に変わりつつあるようだ。

このようにユニークかつ刺激的な存在となったアカデミーだが、正確な全体像が我が国に紹介されているとは言い難い。今回、幸いにもフェア前後に教名のメンバーの工房を訪ねることができた。その取材の成果は次のムックなどで詳細にお伝えできるはずだが、これからも本誌では、記事を通じて彼らを応援していきたいと考えている。

ユニーク・ピースの発信源、独立創作時計師集団。新ブースも完成してますます意気盛んなアカデミー



フランソワ・ポール・ジュルヌ(右)
François-Paul Journe



スヴェン・アンデルセン
Svend Andersen

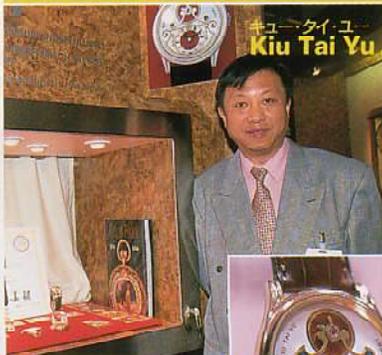
↑有名メーカーの特別モデルも数多く手がけるジュルヌ氏は、数人の時計師とともに、自己のブランドでの時計製造も行う。ふたつの時計を合体させ、双方が誤差を補正しようという「クロノメーター・ア・レゾナンス(共鳴)」や独特なデザインのトゥールビヨンなど、そのレベルは相当なもの。仲間の時計師ビエール・ルフェウラ氏(左)、ジョルジュ・アレッシオ氏(中)とともに



ヴィアネイ・ハルター
Vianney Halter



↑おそらく「海底二万哩」のネモ船長も愛用していたはずの「ザ・タイムマシーン・パーベチュアル・アンティカ」。製作はヴィアネイ・ハルター氏。サントコアに工房を構えるハルター氏の全貌については、次号にて!



キュータイユ
Kiu Tai Yu

←これまでキュー氏の個人的なコレクションとして製作されていたトゥールビヨンだが、中国政府の特許を取得し、市販化に向けて動き出したようだ。さて、どんな時計になるのか?



→ダブル・エスケープメントの「デュラリティ」で知られるデュフォー氏。とっつきにくい印象だが、話してみると広い視野を持った人物であることがわかる。今後は高品質な“普通の時計”を作りたいとのこと。期待しよう



フィリップ・デュフォー
Philippe Dufour



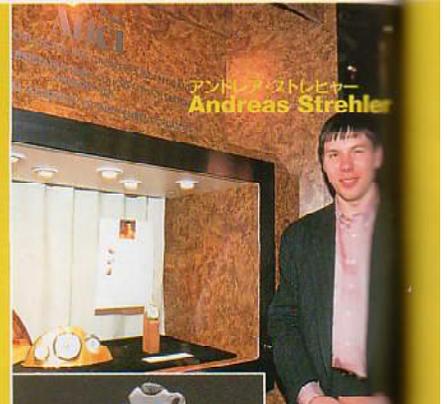
←非常に美しい仕上がりのクロノグラフやムーンフェイズなどの製作を得意とするクラウ氏。もともとはクロック製作が主であったが、近年は天文時計の要素を取り入れたリストウォッチ製作に力を入れている



クリスティアン・ヴァン・デル・クラウ
Christiaan van der Klaauw



→オーデマ・ピゲのコンプリケーション系製作を担当するルノー・エ・バビに在籍後、独立時計師となったストレイヤー氏。まだ若い時計師だが、非常に高度な技術を持っており、独自設計のリピーターなどを製作している



アンドレア・ストレイヤー
Andreas Strehler



おそらく(?)全員が集めたアカデミーのメンバーたち。因も年齢も様々だが、こと時計にかける情熱は皆一緒である